

Title	江戸文化の一つの型：「いき」の歴史的背景(宇治順一郎教授退任記念号)
Sub Title	A Form of Edo Culture(In Honour of Professor Junichiro Uji)
Author	荒井, 孝昌(Arai, Takayoshi)
Publisher	
Publication year	1985
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.28, No.5 (1985. 12) ,p.84- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19851225-04053866

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

江戸文化の一つの型

— 「いき」の歴史的背景 —

荒井孝昌

はじめに

「いき」という言葉がある。この言葉については、九鬼周造氏のすぐれた分析がある。氏によれば、「いき」は「媚態」と「意気地」と「諦め」とから構成されている。「いき」の第一の構成要素である「媚態」とは、一元的の自己が自己に対して異性を措定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度である。「いき」のうちに見られる「なまめかしさ」「つやっぼさ」「色気」などはすべてこの二元的可能性を基礎とする緊張に外ならない。そうしてこの二元的可能性は、媚態の原本的存在規定であって、異性が完全なる合同を遂げて緊張性を失う場合には媚態はおのずから消滅する。媚態の要は、距離を出来得る限り接近せしめつつ、距離の差が極限に達せざることで¹⁾ある。「いき」の第二の構成要素である「意気」は即ち「意気地」である。意識現象としての存在様態である「いき」のうちには江戸文化の道徳的理想が鮮かに反映されているとしている。江戸児の気概が契機として含まれている。「いき」は媚態でありながらなお異性に対して一種の反抗を示す強味をもった意識である。「いき」のうちには潑刺とした武士道の理想が生きている。²⁾「いき」の第三の構成要素は「諦め」である。運命に対する知見に基づいて執着を離脱した無関心である、と述べている。「いき」は垢抜がしていなくてはならぬ。あっさり、すっきり、瀟洒たる心持でなくてはならぬ。「いき」のうちには運命に対する「諦め」と、「諦め」に基づく恬淡とが否み得ない事実性を示している。そうしてまた、流転、無常を差別相の形式と見、空無、涅槃を平等相の原理とする仏教の世界観、悪縁にむかって諦めを説き、運命に対して静観を教える宗教的人生観が背景³⁾をなして、「いき」のうちのこの契機を強調し且つ純化していることは疑いない、と説くのである。

以上を概括すれば、「いき」の構造は「媚態」と「意気地」と「諦め」との三契機を示してい

1) 九鬼周造『「いき」の構造』岩波書店、1930年、pp.19-21.

2) 同 pp.22-24.

3) 同 pp.25-28.

る。そうして第一の「媚態」はその基調を構成し、第二の「意気地」と第三の「諦め」の二つはその民族的、歴史的色彩を規定している。「いき」という存在様態において、「媚態」は、武士道の理想主義に基づく「意気地」と、仏教の非現実性を背景とする「諦め」とによって、存在完成にまで限定されるのである。「いき」を定義して、「垢抜して(諦)、張のある(意気地)、色っぽさ(媚態)」⁴⁾とすることができないであろうか。

九鬼周造氏は「いき」を以上のように分析している。江戸時代の文化は、京都の上層町人を主体とする寛文期の文化、大阪の商人を主体とする元禄期の文化、江戸の一般町人を主体とする文化文政期の文化をもって代表させることができる。「いき」という文化現象が江戸において生まれ、ひろく一般化してくるのはこの化政期である。ではなぞこの時期に江戸において「いき」という文化現象が生成発展し、そして定着してきたのであろうか。以下本論においては、この問題を歴史的に考察するものである。

1. 新興都市江戸の特色

徳川家康の江戸入府は1590年(天正18)8月朔日であったとされている。この頃の江戸城は禄高2000石程度の遠山丹波守直景の館にすぎなかった。屋根はそぎ葺、玄関は船板の古材であったという。城下といっても、八代洲河岸や麴町の辺に百姓家などが100軒ぐらいあったにすぎず、下町の方は潮入地で蘆や茅が生い茂っていた⁵⁾。家康が本格的に江戸構築をはじめるのは1603年(慶長8)からである。参勤交代が制度として確立されるのは1635年(寛永12)であるが、それ以前にも大名の妻子を人質として江戸に置くことは証人の制として存在していた⁶⁾。大名の妻子を江戸に住まわせるためには、まず屋敷を作らなければならない。そのための大名賜邸がはじまるのがこの1603年(慶長8)⁷⁾であった。工事はまず埋め立てから行われた。神田駿河台あたりを崩して日本橋本町を中心に、日比谷から浅草一帯が埋め立てられた。武家屋敷は麻布・赤坂辺の台地に建てられた。新しくできた埋め立て地が町人町となった。

この後参勤交代制度の確立によって、外様大名だけでなく譜代大名の妻子も江戸に移住させられることになり、武家屋敷地が増大した。これに対して町屋は日本橋から深川にかけての下町一帯に限られ、時代がくだると共に山の手にも四ツ谷近辺その他にも町屋が発達したが、人口の約半数を占める町人はわずかな部分におし込められることになった。1869年(明治2)の東京における土地調査によると、武家地1,169万2,000坪で69%、寺社地266万1,000坪で15%、町地は269万6,000坪で

4) 同 pp.28-34.

5) 野村兼太郎『江戸』至文堂、1958年、p.26.

6) 三上参次『江戸時代史』講談社、1977年、p.172.

7) 水江漣子『江戸市中形成史の研究』弘文堂、1977年、p.93.

16%であった。江戸総人口の半数あるいはそれ以上を占めていた町人が、わずか16%の土地に集住していたのである。⁸⁾

江戸時代の全国人口は、その初期にはおよそ1,800万人くらいであったと推測されている。これが18世紀(享保年間)に入ると3,000万人を越え、幕末(慶応3年頃, 1867)には3,300万人に達していたものと思われる。⁹⁾このうち江戸の人口については、1721年(享保6)以来記録が残されている。この中からいくつかを取り出してみると以下のようになる。ただしこれは町方支配場町人の総数であるから武士は含まれないし、能役者、町家に住む武家の家来、支配違いの町人(寺社門前等の町人)¹⁰⁾も含まれていない。¹⁰⁾

	総数	男	女
1721年(享保7)	501,394	323,285	178,109
1722年(享保8)	483,355	312,884	170,471
1736年(元文元)	466,867	298,012	168,855
1742年(寛保2)	446,278	283,647	162,631
1747年(延享4)	454,226	288,027	166,199
1832年(天保3)	474,674	260,149	214,525
1844年(弘化元)	484,472	253,997	230,475

上記の町方人口に加えられていない寺社奉行支配地の人口が5~6万あったと思われる。これに武士及びその家来、使用人が50万前後常住していたと考えられるから、江戸の人口は100万から110万に達していたものと思われる。また上記の町方人口では、男の数が女よりも多い。これは地方から働きに来ている者は独身男性が多かったことと、妻子を国もとに残して来ている者が多かったからである。このことは武士についてもいえた。諸大名の家臣団は多い場合には千人を越え、中小の大名でも数百人にのぼる家臣を江戸に常住させていたから、武家人口は圧倒的に男が多かったのである。

武士が多いこと、男性が多いこと、この2点は江戸が他の都市と際立って異なる点であった。江戸時代中期、京及び大阪の人口はいずれも40万人前後とされているが、武家とその家来、使用人の人口は数万を越すことはなかったと思われる。¹¹⁾

江戸は他の都市に比べて火災の発生率が異常に高かった。江戸で最も火災が多かったのは歌舞伎劇場の中村座や市村座があった堺町・葺屋町界隈であった。この両劇場は1657年(明暦3)の明暦大火で焼失して以来、1841年(天保12)までの185年間に33回全焼している。平均5~6年に1度の割合で全焼したことになる。この両劇場は日本橋に近い下町の中心部にあった。この芝居町に隣接していた伝馬町・小網町・瀬戸物町・小田原町なども、ほぼこれと同じくらい全焼している。中村

8) 西山松之助『江戸の生活文化』(西山松之助著作集第3巻)吉川弘文館, 1983年, P. 18.

9) 関山直太郎『日本の人口』至文堂, 1966年, pp. 63-65.

10) 幸田成友「江戸の町人の人口」『幸田成友著作集』第2巻, 中央公論社, 1973年, P. 249.

11) 関口前掲書, P. 122.

座・市村座の激しい火災の多発に比べ、木挽町の森田座は1663年（寛文3）から1806年（文化3）までの143年間にわずか5回しか全焼していない。森田座のあった木挽町は、幕府や京極家、また紀伊徳川家などの蔵屋敷があって、自火でなければまず類火の心配がなかったからである。¹²⁾ 100万の人口の半数を占める50万の町人が、江戸全体のわずか16%の地域に密集して住んでいた。このことが火災多発の第1の原因であった。しかも狭いところに木造板葺きの家がぎっしり建て混んでいたから、ひとたび火が出るとたちまちのうちに燃え広がったのである。

「江戸っ子は宵越しの金を持たない」という。江戸っ子の気風の良さを表わした言葉とされているが、今持っているあり金をすべて使い切ってしまうと、明日になれば必ずどこかで仕事があった。大工・左官をはじめとする職人たちは、仕事にあぶれるという心配は少なかった。たび重なる大火のあとには、必ず復興景気が待っていた。江戸町人の中には、火事を一種の天災と考え、しょうがないとあきらめてしまうところもあったが、それと同時に、「火事と喧嘩は江戸の花」と、火事を讚美し、火災の後の復興景気を期待する気持も、こころのどこかにはあったのである。火事¹³⁾は、江戸町人のこころの中に気前の良さと同時に刹那主義的なこころも生じさせたのである。

2. 江戸町人

徳川家康が江戸へ入国するのにもなって、家康の旧領三河・遠江・駿河などの町人も移って来た。江戸の町年寄に任命された樽屋藤左衛門・喜多村弥兵衛・奈良屋市右衛門はこの代表格である。彼らの他にも刀剣・鉄砲・大工・左官などの職人、米屋・酒屋・呉服屋などの商人も多数移住し、彼らはその後、御用達町人として特別の地位を与えられた。しかし大阪において大阪町人が元禄文化を生み出した頃、江戸町人たちは新しい文化を創出するほどのエネルギーはまだ持ち合せていなかった。樽屋などの草わけ町人が、その後何代か江戸に住みつき、町人としての実力と自信とを持つようになり、江戸町人独自の文化を創造するようになるのは、江戸開府から約150年、元禄から100年近くを経過した宝暦から天明（1751年—1788年）の頃である。この頃の江戸町人の代表格は札差であった。

関東一円及び伊豆・駿河の天領の貢粗米は、大部分船で江戸に運ばれて来た。幕府の米蔵は江戸浅草（現在の台東区蔵前）にあり、総坪数36,650坪の土地に1番堀から8番堀まで、船入り堀が櫛の歯のように並び、54棟270戸前が堀に沿って建ち並んでいた。後に享保年間に本所にも12棟88戸前が¹⁴⁾建てられた。浅草御蔵には常時40～50万石、本所御蔵には10～20万石が詰められていた。幕府はこの米を春夏冬の3季に分けて旗本・御家人に支給した。蔵米の支給日には、武士たちは自身か家来

12) 西山前掲書, p. 18.

13) 安田武, 多田道太郎『「いきの構造」を読む』朝日新聞社, 1979年, p. 23.

14) 北原進『江戸の札差』吉川弘文館, 1985年, p. 32.

が御蔵役所に出向き、自分の氏名、受け取る米の数量を書いた切米手形を役所に提出して順番を待った。こうした旗本や御家人に代って順番を待ち、支給される米を受け取る代理人があらわれてきた。彼らは支給された奉禄米を米問屋に売却して現金化するまでのいっさいの手続きをするようになった。彼らは御蔵から運んだ米俵を自分の店先に積み上げ、その俵に依頼者である旗本・御家人(札旦那)の名前を書いた札を差しておいた。札差という名称はここから生まれたといわれている。

旗本・御家人の財政が窮乏してくると、札差は金融も行うようになった。旗本・御家人は蔵米を担保に金を借りたのである。札差の代理業としての収入は、札差料が百俵につき金1分、販売手数料も金1分だった。一方金融業としての利子は、最高1年1割5分と定められていたが、実際にはそれ以上の場合が多かった。

札差が最も隆盛をきわめた時期は宝暦から天明期(1751年~1788年)で、中でも田沼時代はその最盛期であった。八代将軍吉宗は「諸事権現様御掟之通」と、その理想を家康の時代に置き、将軍の権威を高め、幕府財政を立て直すことを最大の政治目標としていた。そのために自らも江戸城内にあって儉約につとめたが、一般民衆に対してもきびしい奢侈禁止令を発令し、呉服、諸道具、菓子類などで新しい製品を考案して売り出すことを禁じ、さらに出版統制によって幕府に対する批判を封じた。この結果、幕府財政は年貢増徴策の成功によって一応の立ち直りを見せるが、きびしい奢侈禁止令は一般民衆から楽しみをうばってしまった。吉宗の後を受けて政権の座についた田沼意次は、運上・冥加金と引きかえに株仲間¹⁵⁾に独占的に商業活動を行うことを認めたから、商品貨幣経済は急速に進展した。きびしい統制がしかれた吉宗時代の反動もあって、田沼時代には全般に開放的な気分が流れていた。こうした中であって、高利によって富を蓄えた札差は、江戸の富豪の列に加わり豪華な生活をする者が少なくなかった。

当時江戸には通人の代表といわれる者が18人いた。世に「十八大通」としてもはやされた。この中には、蘭方医で『解体新書』の翻訳にも参加した桂川甫周や国学者で歌人の村田春海なども加えられているが、そのほとんどは浅草蔵前の札差だった。歌舞伎の助六のモデルといわれる札差大口屋治兵衛(暁雨)が吉原に出かけると、仲の町の茶屋は福の神様の御出だといって喜んだと伝えられている。1757年(宝暦7)に市川三升が中村座で助六を演じたときには、頭に江戸紫の病み鉢巻、黒の小袖に杏葉牡丹の紋をつけ、紅絹の裏付きと緋縮緬の襦袢という助六のスタイルはほとんどできあがっていた。これは、当時大通たちのあいだではやっていた格好とまるで同じであった。髪型は本多鬘といい、刷毛先を短くし、中剃を広くする。黒地の三枚小袖、ひざ下まである長羽織に五ツ所絞、鮫鞘の一刀を落差しにして、歩き方まで左右に大手を振り、柱目の通った下駄をはいてゆっくりもも高に足を八字に開いて運んだ。これを蔵前風とよんで江戸市民たちはもてはやしたのである。

15) 同, p. 86.

旗本・御家人への金融によって臣富をきずいた札差も、松平定信の寛政改革によって大打撃を受けることになる。1789年（寛政元）札差に対して棄捐令が申し渡された。その内容は次の通りであった。旗本・御家人に対する札差の債権のうち、1784年（天明4）12月以前のはすべて棄捐する。それ以後、1789年（寛政元）5月までのものは年賦で返済する。要するに、6年以前までの貸付金はすべて帳消しとし、それ以後のものは年賦で返済する、というのである。これによって札差は118万両余の債権を失うことになった。

松平定信の経済に対する基本的な考え方は、「金穀の柄は上に帰すべきもの」であった。金（通貨）と穀（米穀）すなわち経済活動は、幕府が主導権を握り、幕府の統制の下に行われるべきもの、という考え方である。しかし幕府が経済活動を遂行するにあたって、商人抜きでそれを行うことはできない。田沼意次は、特定の商人を株仲間組織にしてこれに特権を与え、彼らを通じて経済全般を統制しようとしたのだが、株仲間から運上や冥加金を取っているため、彼らをきびしく統制することができず、幕府の意図する経済政策を遂行することができなかった。田沼の政治を否定した松平定信は、米価調節、物価安定、金融等の経済政策を幕府主導のもとに遂行するために、新たに勘定所御用達商人を登用し、彼らを通してこれらの政策を実行していった。

棄捐令が発令される前年の1788年（天明8）三谷三九郎以下7名の江戸の豪商が「勘定御用達」に登用された（のちに10名となる）。彼らは江戸に本拠を持つ江戸在住の商人であった。当時江戸での豪商といえば、大阪・京都・伊勢・近江など上方に本拠を置き、江戸に出店を出している上方の江戸店持商人が多かったが、こうした商人は勘定所御用達には登用されなかった。松平定信が上方の江戸店持商人を登用せず、江戸居住の富豪町人のみを登用したのは、江戸の特権的市民層を、純粹の江戸豪商を中心として育成しようという意図があったからである。これは同時に、上方市場に対して劣勢であった江戸市場の地位を、江戸の大商人を結集し育成することによって、相対的に引上げようとした意図もあったのである。¹⁶⁾

「江戸っ子」という言葉は1771年（明和8）を初見とする。¹⁷⁾この後、山東京伝や式亭三馬などによって盛んに用いられるようになる。1771年（明和8）は田沼意次の最盛期にあたり、松平定信が老中として政治の実権を握るのはこの16年後の1787年（天明7）のことである。一口に江戸町人といっても、18世紀の後半のいわゆる田沼期になると、彼らを同質のものとして一括しては把握できぬほどにその社会構造は複雑に変化してくる。すなわち「特権的都市民層」「非特権都市民層」「都市下層貧民層」の3者に分化してくるのである。「特権的都市民層」とは、門閥的大町人層、町役人層（名主・家主）、仲間加入商工業者など、その大方は地主・家持層を主体とする都市上層階層を指している。「非特権都市民層」とは、仲間外商工業者を中心とする地借・表店借層といった中間的

16) 竹内誠「寛政改革」『岩波講座・日本歴史』12, 岩波書店, 1976年, p. 21.

17) 西山松之助『近世文化の研究』（西山松之助著作集第4巻）吉川弘文館, 1983年, p. 151.

階層であり、「都市下層貧民層」は、典型的には9尺2間の棟割長屋に象徴される裏店借層、奉公人層、および無宿・非人といった浮浪人口をも含む江戸社会底辺の階層である。¹⁷⁾ さきに述べた札差や勘定所御用達商人は、典型的な特権的都市民層であり、「江戸ッ子」の中核をなすのは都市下層貧民層である。

18世紀後半は幕藩体制の矛盾がはっきりとあらわれてくる時期で、農民一揆も質的に変化して反体制的な色あいを明確化してくる。江戸においても、農村では生活できない脱落農民が大量に江戸に流入し、江戸内部における階層分化ともあいまって、下層貧民層が量的に増大すると共に、質的にも反体制的性質を明確にしてくるのである。1787年（天明7）に江戸でおこった天明の打ちこわしは、このことをはっきりとあらわしていた。江戸町人が自ら「江戸ッ子」と称する場合、その意識の中には、将軍のお膝元に住む者という権力を背景にした優越感と共に、支配階級である武士に対する抵抗の姿勢即ち反権力意識が含まれていたのである。このような「江戸ッ子」意識は田沼期に形成され、化政期に確立したものであった。¹⁸⁾ 松平定信は勘定所御用達として江戸在住の商人たちを登用した。これによって、それまで上方商人に対して実力では一步劣っていた江戸商人が、自らの商業活動に自信を持つ結果となった。これとちょうど同じ時期、江戸下層民は、封建権力である武士階級に対して、はっきりと抵抗の意志表示を示すほどに成長していたのである。

3. 武士と町人

徳川期を通じて、士農工商の身分制が厳然として存在したことは事実である。しかし武士の窮乏化にともなって、武士が富有な町人と養子縁組をする例が増えてきた。18世紀後半になると、この傾向はさらにすすんで、町人が旗本・御家人の株を買って武士になる、いわゆる御家人株の売買は半ば公然と行われていた。身分制の弛緩は幕末になるといっそう激しくなる。文化面においては、茶道、華道、謡曲等武士階級の独占物だったものが、町人が実力をそなえてくると共に、町人の間にもこれらのものが浸透してくる。そして18世紀後半、宝暦から天明にかけて町人勢力が進展してくると民衆文化が急激に勃興して、こんどはこの民衆文化が武家社会に逆輸入されるという文化現象が起ってくる。この現象は化政期になるとさらに進んで一般化してくるのである。

当時町人の娘たちが良縁を得るためには、武家奉公が必要であった。その武家奉公のためには、¹⁹⁾ 富本とか常磐津などの三味線とその浄瑠璃の教養が不可欠の条件であった。武家の妻女たちも芝居見物などに出かけることはあったが、町人のように自由に外出することはできないので、自分の屋敷の中で琴、三味線などを楽しむ場合が多かった。そのようなとき、奉公にあがっている女中たち

18) 竹内誠「寛政一化政期江戸における諸階層の動向」西山松之助（編）『江戸町人の研究』第1巻、吉川弘文館、1972年、P. 339.

19) 西山前掲書、P. 205.

がお相手をさせられることもあるので、いろいろな芸を身につけておく必要があったのである。

文化の面においては、18世紀後半から19世紀の化政期をむかえて、武士と町人の差はほとんど無くなっていた。洒落本・黄表紙の作者である大田蜀山人、柳亭種彦は幕臣である。滝沢馬琴も武士階級の出であった。寛政改革において洒落本・黄表紙を弾圧し、風俗を乱す者として山東京伝を手鎖50日の刑に処した松平定信も、17・8歳の部屋住時代には黄表紙を楽しみ、自身『大名かたぎ』²⁰⁾という黄表紙まがいの作品まで書いていたのである。

狂歌においても武士と町人の区別はまったく見られない。江戸狂歌は18世紀後半に武士の間におこり、しだいに町人も楽しむようになり、明和から天明(1764年～1788年)にかけて盛んになったものである。愛好家たちは一人の指導者を中心に「連」というグループを結成していた。四方赤良(大田南畝)の山手連、朱楽管紅の朱楽連、宿屋飯盛の伯楽連、浜辺黒人の芝連等である。四方赤良はさきにも述べた洒落本・黄表紙の作者でもある大田南畝(のちに蜀山人とも号す)で代々の幕臣、朱楽管紅も幕臣であった。宿屋飯盛は日本橋小伝馬町の宿屋、浜辺黒人は本芝三丁目の本屋を営んでいた。これらの連には武士町人の区別なく参加できた。1786年(天明6)宿屋飯盛が選して出版した『天明新鑄五十人一首・吾妻曲狂歌文庫』には、16名の武士が含まれている。

このように江戸時代中期の宝暦から天明期(1751年～1788年)になると、身分制度の重圧から逃れて遊びの世界で自由にふるまうという現象が、町人だけでなく武士の間にも広く行われるようになった。²¹⁾これは身分制からの逃避であると同時に、消極的な抵抗の姿勢でもあったのである。

4. 「いき」の定着

「いき」という言葉は明和頃(1764年～1771年)江戸深川で使われだし、その後しだいに広まっていったものであるが、江戸の美意識として定着するのは文化文政期(1804年～1829年)²³⁾である。「いき」というのは江戸の言葉であって、上方では「粹(すい)」とはいっても、「いき」とはめったにいわない。²⁴⁾江戸において安永頃(1772年～1780年)助六に見られるような一風変わった姿をして吉原を闊歩した札差たちは、江戸の人たちから大通といわれてもてはやされた。それが松平定信の寛政改革をへて、文化文政頃(1804年～1829年)になるとかなり変わってきた。蔵前風も派手な模様は太神楽のようだと嘲笑され、目立たぬところに贅をつくすのが通だとされるようになった。上着は結城紬ぐらいいで、下着に御召を用いる。細かい堅縞が流行し、渋い身なりを喜んだ。遊びも以前のよ
うな馬鹿さわぎをすることは少なく、ひとりで自ら楽しむという傾向が強くなった。それが次第に

20) 森銚三「楽翁公の戯作」『森銚三著作集』第11巻、中央公論社、1974年、p. 356。

21) 西山松之助「江戸ッ子」西山松之助編『江戸町人の研究』第2巻、吉川弘文館、1974年、p. 66。

22) 中尾達郎『すい・つう・いき』三弥井書店、1985年、p. 166。

23) 九鬼前掲書、p. 93。

24) 多田道太郎『「いき」の構造』解説、九鬼周作『「いき」の構造』(岩波文庫)岩波書店、1981年、p. 197。

一般的となり、粹とかいぎとか呼ばれ、以前のように馬鹿々々しくさわいだりするのを野暮とか田舎者として軽蔑するようになったのである。²⁵⁾

では、なぜ「いぎ」が江戸で文化文政期（1804年—1829年）に定着したのであろうか。「いぎ」は、九鬼周造氏によれば、「媚態」を基調とし、「意気地」と「諦め」はその民族的、歴史的色彩を規定している。²⁶⁾「媚態」は男女間の二元的可能性を基礎とした緊張関係であるから、歴史的考察の域外にある。江戸という場所と文化文政という歴史とを規定するのは「意気地」と「諦め」である。

『「いぎ」の構造』では「意気地」を武士道の理想主義に基づき、としているが、これには反対意見がある。多田道太郎氏の「上方に対する対抗意識、武士に対する意地として、たとえば町奴のような階層がでてきて、そこに意気地が根をおろしたのではないか。」とするものである。²⁷⁾私も「意気地」を武士道の理想主義に基づき、という考えは取らない。「意気地」の源泉は武士に対する抵抗にあると思う。そこで問題となるのは、「武士に対する抵抗」が文化文政期（1804年—1829年）江戸町人の間に定着してきた理由はどこにあったのか、ということである。

江戸時代初期、特に元禄期（1688年—1703年）頃までは、支配階級である武士と被支配階級である農民や町人との差は歴然としていた。これは政治的にも経済的にもいえることであった。武士は農民・町人に対して支配階級としての自信を持っていた。家康は百姓が「死なぬ様生きぬ様にと合点して収納申付る」といったと伝えられている。これは絶対的な権力を背景としていえる言葉であった。幕末に近い1842年（天保13）、近江の琵琶湖周辺の農民は、幕府の検地に反対して一揆をおこした。検地は年貢増徴をとまらうことが多かったからである。この一揆に対して幕府は「検地十万日延べ」という譲歩を余儀なくされ、事実上検地を断念しなければならなかった。幕府と農民との力が逆転したのである。

幕府初期の江戸において、わずかに武士に抵抗したのは町奴である。江戸はその成立事情から圧倒的に男性が多かった。しかも血気盛りの男が多かったから、大名と大名との対立、幕府家臣団と大名家臣団の対立、上位者と下位者の対立など、時には武力抗争に発展することもあった。こういう対立は当然町人に大きなしわ寄せとなって、町人が大きな被害をこうむることも少なくなかった。強力な武家権力が町人に対して無法を行なっても、町人を保護する法律など全くなかった。²⁸⁾いぎおい武士に対抗する実力を持つものとして町奴と呼ばれる男だてが多数出現したのである。しかし、幡随院長兵衛と旗本水野十郎左衛門の例に見られるように、抵抗をつらぬき通すことはできなかった。

町人の中には経済力で武士に対抗しようとするものも現われてくる。1681年（天和元）、5代將軍

25) 野村前掲書、P.137.

26) 九鬼前掲書、P.29.

27) 多田前掲岩波文庫解説、P.207.

28) 西山前掲論文「江戸っ子」『江戸町人の研究』第2巻、P.54.

綱吉が上野寛永寺に参詣したとき、浅草の町人石川六兵衛の妻が伊達くらべをしかけた。伊達くらべとは衣装くらべのことである。綱吉は六兵衛一家を身分をわきまえぬものとして財産を没収し追放処分にした。

元禄の頃までは武士の間に質実剛健の気風はまだ色濃く残っていた。下馬將軍とあだ名された酒井忠清が、江戸城で評議のとき、汗ばんだので着ていた小袖を脱ぎ、欄干にかけて乾したことがある。よく見ると裏の脊のあたりに大きなつぎが当ててあって、同列の諸侯も見ていることとて心にはずかしく覚えた。邸に帰ってから衣服のことに当たっている老女に、殿中出仕の下着につぎを当てるのは困る旨をいうと、その老女は、太平な御世になってそのようなことをおっしゃいますが、私の生きております間は、新調はなりませぬと答えた²⁹⁾という。

関が原役(1600年)から約100年を経過して元禄年間(1688年—1703年)になると、緊張の糸が切れたように、あらゆる面で武士階級の墮落が目につくようになってきた。当時の武士の様子は尾張藩御城代組同心朝日文左衛門の日記『鸚鵡籠中記』にくわしく書き留められている。御城代組同心というのは、100石どりの同心48人で構成され、3人で1班をつくり、9日目ごとに登城し宿直勤務をするのが役目であった。文左衛門たちは、この1カ月に3度、9日に1度の出仕のときに、同役の3人がかわるがわる弁当番となり、同役3人と足軽7人分の酒食を用意して登城した。月のいい夜などはみんなで月を見ながら弁当に酒を楽しんだ。中には酩酊して石垣から転げ落ちるものもいた³⁰⁾。

刀は武士の魂とされているが、この刀を忘れるものも1人や2人ではなかった。尾張藩御書院番新見康右衛門は、公用で名古屋城下を発ったとき、東海道新居の関で足をとめた。ここから船で浜名湖を渡る。その渡船を待つ間、茶店で腰から大刀をぬき、弁当をつかった。そしてそのまま船に乗ってしまった。新見が気がついたときには、大刀はすでに道中奉行に届けられていた。新見はその場から逐電してしまっ³¹⁾た。この他にも名古屋城内に刀を忘れるもの、芝居見物に行つて刀を忘れるものなど、武士階級の精神的弛緩はあきらかだった。こうしたことは尾張藩に限ったことではなかったであろう。このような武士階級の状態を目の当りにして、町人は武士もやはり自分たちと同じ人間であるという感を強めたことであろう。すでに経済的には商人に圧迫されていた武士は、精神的にもさしたる違いはないということを町人階級に晒していくのである。

彼我の力の差が圧倒的な場合には、抵抗の姿勢はおこってこない。力の差がある程度接近したとき、はじめて抵抗の姿勢が生まれてくるのである。

1733年(享保18)江戸で2千人近い群衆が、幕府御用達の米問屋高間伝兵衛の家を襲った。江戸におけるはじめての打ちこわしであった。直接の原因は、高間伝兵衛が8代將軍吉宗の米価騰貴策

29) 進士慶幹「武士の生活」『講座日本風俗史』第3巻、雄山閣、1958年、p.288.

30) 神坂次郎『元禄御置奉行の日記』中央公論社、1984年、p.8.

31) 同、p.30.

を助けて米の買占めを行っていたからであるが、その背景としては、民衆の幕府に対する不満が鬱積していたことがあげられる。吉宗は幕府財政立て直しのために年貢増徴策をとった。このため農村は疲弊し、土地を手ばなして都市へ流れ込むものが多かった。彼らは武家や商家の奉公人、下級職人、日雇労働者などの都市下層民となっていた。しかも吉宗はきびしい奢侈禁止令によって民衆から楽しみをも奪ってしまった。呉服、諸道具、菓子類などで、新しい製品を考案して売出すことを禁止し、さらに出版統制によって幕府に対する批判を封じた。楽しみを奪われ、口を封じられた民衆は、米価騰貴をきっかけとして、幕府に対する不満のはけ口を高間伝兵衛に向けたのである。

1784年(天明4)、時の老中田沼意次の子、若年寄田沼意知が殿中において佐野善左衛門に斬殺されるという事件がおこった。この事件は佐野善左衛門の私怨によるもので、田沼の政治を批判しての公憤によるものではなかったが、世間一般の民衆は、佐野善左衛門の行為をおおいにほめたたえた。この事件の直後から、高騰を続けていた米の値段が偶然下りはじめたこともあって、人々は佐野善左衛門のことを「世直し大明神」と呼んだ。切腹を申し付けられた善左衛門が葬られた佐野家の墓所には連日参詣人が群集し、「世直大明神」という幟が数十本も立てられ、寺の門前には蓆を敷いて花や線香を売る所が3カ所もできたほどであった。これにひきかえ、田沼意知の葬列には石が投げられるというありさまであった。³²⁾ 当時の民衆の、田沼に対する感情をあらわしているものといえよう。

この頃から幕府内部における田沼の勢力は明らかに下降していった。この時期、東北から関東一帯にかけて冷害による飢饉が続いたことも田沼にとっては不運であった。1783年(天明3)には東北地方に多数の餓死者がでた。世にいう天明飢饉である。このため江戸や大阪などの大都市へも米をはじめとして物資の入荷が激減し、諸物価が高騰していた。こうした状況の中で、1786年(天明6) ついに田沼は老中の職を解かれることになった。田沼解任を知った江戸の民衆は狂喜した。「水は出る、油はきれる其中に、何とて米は高くなるらん。方々よろこべ、田沼が役は上ったはやい」という落首が出たほどであった。田沼が解任された後、責任ある為政者を欠いたまま、江戸・大阪の物価はじりじりと高騰を続けた。江戸においては、百文につき5合5勺の高水準を保っていた米価は、1787年(天明7)5月に入ると4合5勺、さらに3合と高騰した。約1年前の田沼失脚当時に比べると、実に3倍以上の値上がりであった。

天明の打ちこわしは、まず大阪からはじまった。1787年(天明7)5月10日、市中において民衆が蜂起し、米問屋200余軒が打ちこわされた。これに引続いて江戸でも打ちこわしがおこった。5月18日、江戸市中のあちこちに誰れともなく人が寄り集まりはじめた。それは誰れが命じたというのでもなかった。まず本所扇橋辺・深川六間堀辺で米屋が打ちこわされた。質屋や酒屋で打ちこわされたものも多くあった。20日になって打ちこわしはさらに広まった。赤坂辺から四谷、青山にい

32) 辻善之助『田沼時代』岩波書店、1980年、P.48.

たり、翌21日には芝金杉から高輪辺へと広まっていった。さらに新橋辺から京橋・日本橋へと進み、夜に入って神田明神から湯島・本郷辺にもおよんだ。³³⁾この間、江戸町奉行は手のほどこしよるがなかった。この4日間、江戸はほとんど無政府状態であった。22日になってようやく町奉行が出馬し、民衆の蜂起も下火となっていった。

打ちこわしがおこったのは江戸、大阪だけではなかった。全国的に、しかもほぼ同時におこっている。5月には江戸、大阪に続いて、京都・奈良・伏見・堺・大津・和歌山・駿府・甲府・福井・広島・下関・博多・長崎などに騒乱がおきている。続いて6月には東北の岩代・石巻・中部では駿河の藤枝・丸子、近畿の相生、九州では久留米・熊本などに波及していった。³⁴⁾こうした打ちこわしは、江戸城中に残っていた田沼派に対して決定的な打撃を与えた。田沼派の役人はつぎつぎと解任された。そして1787年(天明7)6月19日、松平定信が老中に就任する。以後1793年(寛政5)までの7年間、松平定信の寛政改革が行われることになる。

松平定信の商業政策は、田沼の商業政策を否定することにあつた。田沼は特権商人に独占権を与える見返りとして、商業的農業から生じる利益を運上という形で吸い上げた。この田沼の政策を否定しても、商業そのものを否定することはできない。松平定信は新たに勘定所御用達商人を選定した。彼らは江戸に本拠を持つ江戸在住の商人であつた。そしてこの翌年の1789年(寛政元)に札差棄捐令が発せられる。これにより武士に寄生して財をなした札差は没落することになるが、代って江戸在住の商人が勘定所御用達に登用されたことは、江戸町人とりわけ上層商人に自信を持たせることになった。札差に代って江戸町人の代表格となつた勘定所御用達は、十八大通に見られるように、助六を気どり、あからさまに財力を誇示するようなことはなかつた。松平定信は銭湯や女髪結などの庶民生活の細部まで取締りの対象とした。江戸の民衆は頻発される奢侈禁止令にしたがうと見せて密かに抵抗をこころみたのである。松平定信が老中の座をしりぞいて、文化文政というはなやかな時代を迎えても、再びただただ豪華絢爛を良しとする風にはならなかつた。みさかいなしの贅沢はかえって野暮とされた。しかしお上のいいなりにひたすら質素儉約につとめるのを良しとしたわけでもなかつた。お上にしたがうと見せて、どこかで自分の意地を通したのである。それが江戸町人の精一杯の抵抗であつた。

『「いき」の構造』によれば、「いき」という存在様態において、「媚態」は、武士道の理想主義に基づく「意気地」と、仏教の非現実性を背景とする「諦め」とによって、存在完成にまで限定される、³⁵⁾としている。「仏教の非現実性を背景とする諦め」とは、「運命に対して静観を教へる宗教的³⁶⁾人生観」すなわち仏教の無常観ということになるであろう。「諦め」の根底にこの無常観があるこ

33) 同, P. 150.

34) 青木虹二『百姓一撥の年次的研究』新生社, 1974年, P. 100.

35) 九鬼前掲書, P. 30.

36) 同, P. 28.

とは確かであろうが、江戸時代中期以後、江戸という場所で「いき」が生成し定着するためには、歴史的、地理的に特殊な条件がなくてはならないであろう。「いき」という言葉が京や大阪ではなく江戸で、寛永や元禄ではなく化政期に定着した理由はどこにあるのだろうか。

まず第1に考えられることは、江戸が他の都市と比べて異常に火事が多かったということである。江戸はその成立事情から、町人は人口に比して狭い地域で生活することを強制されたため、ひとたび火災が起るとたちまち大火となった。場所によっては5～6年で1度の割で火事にありというように、常識では考えられないような状態であった。これは江戸町人に刹那主義的な生き方を強いることになった。営営ときずきあげた富も、一夜のうちに文字通り灰燼に帰したのである。火事はまさに天災であった。天災として諦めなければ江戸で生活していくことはできなかった。火災を、何年に1度かやってくる天災と思い定めることによって自分の心の整理をつけたのである。

つぎに考えられることは、抵抗への諦めである。江戸町人は、支配階級である武士に対して抵抗の姿勢をとってきた。しかしその抵抗は所詮貫き通すことはできなかった。もし抵抗を貫き通せば破滅が待っていた。欠所、追放はおろか、死までも覚悟しなければならなかった。江戸時代中期以後、武士と町人との差は、あらゆる面で接近しつつあった。茶道、華道、狂歌、音曲等遊芸の世界に入れば、武士と町人との差はまったくなかった。しかし、江戸町人がどのように成長しようとも、武士階級に対する抵抗をどこかで諦めなければならなかったのである。

江戸の町人は、「抵抗」と「諦め」という相反する行動をたくみに使いわけながら生きていたのである。彼らは新時代を革命的に打開していくようなたくましい行動には走らなかった。権力の重³⁷⁾圧から一步身をかわしたところで自分達の意地を通したのである。

「いき」は、江戸時代中期に江戸で生まれ、幕末に近い文化文政期に江戸に定着した美意識である。被支配階級である町人が、支配階級である武士に対して示した抵抗の姿勢の中に生まれた美意識、ということができるとであろう。「いき」とは畢竟わが民族に独自の「生き」かたの一つではある³⁸⁾まいか。

〔国際商科大学〕

37) 西山松之助『近世文化の研究』（西山松之助著作集第4巻）吉川弘文館、1983年、p.164.

38) 九鬼前掲書、p. V.